

構造家・森部康司

設計の糸口を形に!

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント



■ 教育と実務と

久しぶりに、老舗音響ホールの人見記念講堂の側を歩く。そして、昭和女子大学付属昭和こども園（設計：納谷建築設計事務所、本誌2016年6月号掲載）を一回りしてから、昭和女子大学生活科学部研究室の一角に。こども園の構造設計をした准教授の森部康司さんは、環境デザイン学科で構造を教えている。リケジョたちの華やいだ声が行き交い、描かれたイラストも可愛い、白板の前でのインタビューです。建築に惹かれて集う彼女たちに、構造の意味や楽しさも伝えたいから、机上の計算だけでなく、信号機など実在するモノを教材にしていると。彼の教える構造力学に、デザイン性が息づいているのは、熊本県立球磨工業高等学校管理棟で、2014年第9回日本構造デザイン賞受賞でも証明済みです。

■ エンジニアへの一歩

出身の名古屋大学では、地元で就職する学生が多いのに、東京のオーク構造設計（構造家・新谷真人/コラム42回）へ。大学院で教鞭を執っていた構造家・佐々木睦朗先生による「トイレ勧誘」がキッカケとか。「モテる小道具がギター、みたいなノリでアトリエに憧れたんです…」というが、相当な照れ隠し、

シャイな発言。建築家とじっくり対話し、設計主旨に合う構造を提案していく、硬派なのです。

覇志堂の「何故東京へ?」の疑問も解け、恩師、松井徹哉教授に、しっかり構造設計の魅力を伝授されていたからこそ、飛び込めたのですね。

■ 師匠の徹夜

「新谷真人先生がいなかったら、今の僕はいない」。オークは並列で、新谷先生とマンツーマンの体制だから、構造デザインを直接教えてもらえた。実は入所前に挨拶へ行ったら、その日から徹夜だったというハードな修業時代。一緒に徹夜している先生や、教師的存在の構造家・佐藤淳先輩がいては、ギブアップできなかったそう。

構造だけでなく、心の広やかな師匠からは人生の多くを学んだと、森部さん。頻繁に結集するオークOBたちとともに、「感謝」の気持ちで一杯です。

「愛弟子評」とと、新谷先生を訪問した。森部さんから、オークでの一番思い出深い建物を聞き出して聞いて下さった。初担当の「志木の家」（設計：上條美枝建築設計室）だそうで、梁のない鉄骨造の住宅です。「今、同じ仕事をしたら、もっと深く考えられた」と、未だに反省していたそう。誠実な技術者魂に感心したと語る新谷先生なのでした。将来に向けてのコメントをお願いしたが、「何もない。建築も構造デザインも好きな、二刀流の逸材。教育者としては僕より向いているかもしれない」と。かつ、自転車のメカに関しては、相当なマニアで、「そんなところも構造に向いているのかな」。ただ、好き嫌いがハッキリしていて、設計事務所の担当所員で、高ぶった態度の人はNGでそれを先生に具申したとは。「独りになれる場もあるといいですね」とはヤツリいただいた一言。

■ 協調する構造家

森部さんが須藤崇さんと組む「yAt構造設計事務所」の最近作、横浜市電保存館「しでんほーる」（設計：abanba）。この建物は子どものための多目的建築物で、屋根スラブには接していない梁が、抜けた天井空間を演出している。設計者の番場俊宏、絵里香さんはCAt出身。森部さんとはお互いに所員時代からの付き合い。共に造った構造の技が光る建築が見られた。構造家・森部康司さんは、師匠譲りの素早い判断力で、建築の次代に立っています。